

草 土 記

一額縁商の生活記録

水谷啓二著





水谷啓二著

草土記

一額縁商の生活記録

講談社刊

記 土 草

著 者 略 歴

昭和十年、東大經濟學部卒業。
現在、共同通信社經濟部次長。
著書に「延安報告」、「インフレ
終息と日本經濟」などがある。

(黒柳製本)

昭和二十六年十月二十五日 印刷
昭和二十六年十月三十日 發行

定價 一五〇圓

著 者 水谷 啓二 みづたに けいじ

發行者 野間 省一 東京都文京區音羽町三ノ一九

印刷者 益子 恒義 東京都文京區音羽町三ノ一九

印刷所 豊國印刷株式會社 東京都文京區音羽町三ノ一九

發行所 東京都(小石川局區内)文京區音羽町三ノ一九
株式會社 大日本雄辯會講談社

(全國出版) 振替口座 電話(三三) 代表 一三八一
(協會會員) 東京三九三〇 九段 八五一

落丁本・亂丁本 お取りかえいたします。

目

次

機	縁	七
植	木	鉢
鉢	八	
第二の出	發	九
九		
金ちゃん	と清ちゃん	九
九		
波		二
二		
母	の	肖
像	一	八
紫	の	切
符	二	七
商	道	托
鉢	二	七
滿		洲
三		
つ	め	たい
風	一	三
轉		落
一		四
谷		底
一		九
ひ	じ	さ
虫	一	五

筑波	風		一六二
赤富	士		一六六
桐の	木		一七一
早	春		一七七
責任	販賣		一八三
疑	惑		一八七
自	覺		一九二
あとがき			二〇五
草土記を讀んで (諸名士の評)			三二

裝 幀 向 井 潤 吉

草

土記

一額縁商の生活記録



赤 い 箸

私が十一歳のときでした。學校から家に歸つて來て、

「母さん、なにかたべたい。」

と言いますと、母が、

「お店のし、ようが、板を半分とりな。」

と申しました。し、ようが、板というのは、砂糖を四角い板のようにかためた菓子で、し、ようがの味がついておりました。それには斜めに割れ目がつけてあつて、四角のまゝの一つが一錢、半分に割つた三角のが五厘でありました。母はいつも私に、半分の三角のだけしかくれませんでした。一度でいゝから、四角のをたべてみたい、というのが、そのころの私の切ない願ひでありました。

私の家は、廣島縣の可部町かぶという田舎町の貧乏な商家で、煮賣屋かきうをしており、店先には駄菓子だかしの箱がならべてありました。そのとき母は臺所にいて、店の方に目がとどかないのを幸い、私は菓子箱から、四角のし、ようが、板を一つとつて、ふところにねじこみ、

「あそびに行つてくるよう。」

と言つて、外に駆け出しました。歩きながら、し、ようが、板をみんなたべてしまい、砂糖の甘味

がまだ舌の上にたゞよつているうちに、私の心は悔恨にうずき始めました。私は、母がこわいのです。私の父は、若いころ、財産をみんな親類に横領されてしまった、というくらいのお人好しで、仕事の上でも能のない人でありましたから、店のことも母が支配しておりました。だから、母は私にたいして、やさしい母親であると同時に、きびしい父親の役目も果しておりました。

夕方になつて、びく／＼しながら家に歸りますと、案の定、

「宗次郎、ちよつとこゝへ來な。」

と母から呼ばれました。臺所で夕飯の仕度をしている母のところへ行きますと、母はきびしい顔をして申しました。

「宗次郎、お前は、しょうが板を一つごととつたね？」

「……………」

母から見つめられると、私は嘘を言うことができません。

「誰が一つごと持つてゆけと言つたかい？ 黙つて店のものを持ち出すのは、盗つ人だよ。」

「……………」

「盗つ人を家の中におくわけにはいかない、今日かぎり親でも子でもない、出てゆきなさいッ！」

私は、言い出した後へひかない、母のはげしい氣性を知っていますので、青くなりました。母は、くるりと後を向いたかと思うと、お椀と箸を持つて來て、私の目の前につきつけました。「これを持つて、乞食して生きてゆくがよい。」

「母さん！ ぼく、わるかつたよ、もうけつしてしないから、かんにんして。」

私は、泣き出しそうにして、言いました。母は、しばらく私を見つめておりましたが、

「じやお前、明日から商賣にゆくかい？ 商賣にゆくのと、乞食をするのと、どつちがいい？」

と尋ねました。私は、商賣にゆく方がいい、と答えました。今から考えると、母は子供の私に、商人にするための訓練をはじめめる機會をねらつていたのです。

あくる日、母は、しめじという茸を仕入れて来て、私にそれを賣つて来るように申しました。私は、しめじを二つのざるに入れ、それを竹の棒の兩端にぶらさげて、擔いで家を出ました。學校の友だちが、どこからか私を見てはいまいか、と思うと氣が氣であります。それらしい姿がちらと見えると、私はあわてて路地の家かげにかくれました。「しめじはいりませんかあ——。」と呼んであるくんだ、と母から言われていましたが、どうしてもそれが口から出ません。私は、たゞぐるぐると町をまわつたばかりで、一つも賣らずに、しょんぼりと家に歸つて來ました。

そのときは、母はべつに叱らないで、品物をかえてやろう、と申しました。あくる日、母は、あずま鮎といつて、こはだという魚を背中の方から割いてはらわたを出し、それにおからをつめて握つたものを二十ばかりつくり、それを親類のどこそに賣つてくるように、と申しました。あずま鮎を重箱につめ、それを重臺にのせて手にさげ、親類の家に持つてゆきましたら、一軒で五つ六つずつ買つてくれました。あるいは母から、買つてくれるように頼んであつたのかも

しません。

それから私は、だん／＼と廻る範圍をひろげて、一日に五十ばかり賣るようになりました。よく買ってくれる一軒の家にゆくのは、學校の運動場の横を通らねばなりませんでした。ある日、私が、重臺を手にかけて、運動場のそばを通りかゝりますと、運動場には私と同級の子供が何人かあそんでおりました。私は、氣づかれないように通りすぎようとしたが、ついに見つかつてしまいました。

「宗ちゃん、どこへゆくんだい？」

「親類のうちに、お使いにゆくんだ。」

「その箱は何だい。」

「何でもないや。」

足早に行きすぎようとしたとたん、私は何かにつまずいて前に倒れ、重臺をほうり出しました。重箱が重臺からおどり出し、青い鯨や赤い箸があたりには散亂しました。私は顔から火が出るような思いで、大いそぎで散らばつた鯨をかき集めて重箱に入れ、重箱を重臺におさめると、それをさげて、一さんに驅け出しました。うしろの方で、デラ／＼笑つてゐる聲がきこえました。家かげの、運動場から見とおしのきかぬ場所に来て、私は足をゆるめました。すると、膝小僧や手のひらが、急にすき／＼と痛み出しました。氣がつくと、膝小僧には血がにじみ、着物には土ほこりが一ぱいついていました。重臺を土の上におろし、着物のほこりをはらつておりますと、

腹だたしさと悲しさが入りまじつてこみあげて来て、鼻の奥がツーンとあつくなり、涙がこぼれそうでした。

あくる日、學校へゆきましたら、同級生の一人が赤い箸を出して、

「宗ちゃん、これ、お前のだろ。」

と言いました。

「知らないや。」

と言いましたが、私は、自分の顔がみる／＼赤くなつてゆくのがわかりました。きのう運動場にいた子供たちから、すでにみんなに、重臺をほうり出したときの私の様子を、おもしろおかしく話してあつたと見えて、五、六人がどつと笑い出しました。

それから、母が叱つてもすかしても、私はあずま鮭を賣りにゆこうとはしませんでした。

母はまた品をかえ、こんどは手拭や、きれいな模様のついた小切れを仕入れて来て、それを、町はずれの農村をまわつて賣つてくるように、と申しました。私は、日曜ごとに風呂敷包を背負つて、農家まわりをすることになりました。そのころ、私の町にも日曜學校が出来て、日曜になると、オルガンに合わせて讚美歌をうたう子供たちの聲が、私の家まではつきり聞えて來ます。私の同級生も、たくさん行つておりました。私も唱歌が好きでしたから、ゆきたくて／＼てたまりませんでした。それで、一度母に、ぼくもゆきたい、と言いましたら、一言ではねつけられました。日曜の朝が來ると、私は悲しくて、顔を洗いながら、すゝり泣きました。

そのころ農家へゆくと、どこの家でも、女の人が、ボタン、ボタン、と音をさせて、むしちあみま 縫編機でわら^{むしち}筵を編んでおりました。そこへ、

「おばさん、こんにちは。」

とよつて行つて、

「とてもいゝ切れがあります、見てください。」

と言つて、わらの上に風呂敷をひろげ、その上に、手拭や、赤や桃いろの花模様のついた切れ地をならべました。すると、金のない農家の娘やおかみさんは、よく、米ととりかえてくれました。

ある日のこと、いつもより賣れなかつたので、すこし遠出をして、よけいにまわつているうち、すつかり日がくれてしまいました。誰も通らないまづくらな田舎道を、町の方へいそぎ足にあるいておりますと、ピタ、ピタという、自分の草履の音だけが耳について、とても心細くなります。話に聞いたことのある追^おい^は剃^はぎが出て、私が背負っている米や、ふところのお金をとりはしまいか、と思うと、おそろしくて、思わず小走りになります。ふと、前方を見ますと、遠くにボツリと提燈の火があらわれ、それがだん／＼こちらに近づいて來ます。私は、提燈がゆきすぎないうちに、できるだけ歩いておこう、と思つて急ぎました。提燈はゆれながら近づき、やがて足音がきこえ、提燈に書いた木の葉の紋がくつきり見えしました。それは、私の家の^か梶^かの葉の紋でした。

「母さん！」

「宗次郎かい、おそかつたので迎えに來たよ。」

私は母とならんで、その日の商賣のことを話しながら、家に歸りました。家に入ると、火鉢には、私の太きなうどんの鍋が掛けてありました。私は、湯氣のもうくと立つてゐる熱いやつを、何杯もおかわりしました。腹一杯になつた私は、母と同じ寢床にもぐりこみました。姉と私の二人きようだいで、末つ子であつた私は、まだ、母と一しよに寢ておつたのです。

黒い風呂敷

私は、十五歳の年に、小學校の高等科を卒業しました。私は學校では成績がよかつたので、もつと上の學校にゆきたいと思いましたが、母は、商人には學問はいらないと言つて、ゆるしてくれませんでした。母の理想は、私を紳商人つとまにすることでありました。私の生れた可部町かべは、そのころ山まゆ紬の產地として、全國に名が知れておりました。紳商人は、この山まゆ紬を問屋から仕入れて、行商してあるくのですが、そのころなか／＼みいりのいゝ商賣でありました。それで母は、顔見知りの紳商人が私の家をたずねてまいりますと、

「どうか、うちの宗次郎を、一人前の紳商人にしておくんなさい。」

とたのみ、酒など出してもてなすのでした。私は小學校を出ると、間もなく紬の行商に出され

ました。四月もおしつまつたある日、母は増井（ふくゐ）という、親類筋の紬問屋から、山まゆ紬を三十反ほど借りて來ました。そして私に、

「さあ、これでお前の荷ができたよ。明日から、自分のおまんまは、自分でかせいでたべるんだよ。」

と申しました。その晩に、私は、三十反の紬を行李に入れ、それを大きな黒い風呂敷で巻き、まん中を紐でしばり、それを背負つて風呂敷の兩はしを胸のところで結び、家のなかを歩いてみました。ずつしりした重みが胸と肩にかゝり、よほど前こゝみになつていないと、うしろへひつくりかえるような氣がしました。

その晩も私は、母と一しよにやすみました。明日から、どんなところに寝るのだろう、と思うと、とても心細くて、なか／＼眠れませんでした。私は、すでに寢入つてゐる母のふところに、そつと手を入れて、母の乳房をさぐりました。

あくる日の朝、私はくらいうちに起されました。臺所の火が、あか／＼と燃えておりました。母は、私の商人としての門出（かでで）を祝つて、白いごはんにお頭（かしら）つきの魚をそえてくれました。母は、「宿（やど）に着いたら、荷や身の廻りのものに氣をつけるんだよ。」とか、「身體を大事にして、便りを忘れないように。」とか、いろいろ旅先の注意を與えて、小遣いに二圓くれました。私は、まだ夜の明け切らぬうちに家を出ました。曲り角に來てふりかえると、母はまだ門口に立つて見送つておりました。